

# ルワンダ王国の政治思想における 「祖国のために死ぬこと」

宇 野 公 一 郎

## 目 次

1. はじめに
2. 遠征と略奪
3. 征服と解放者
4. 破邪と浄化
5. 解放者の伝承
6. 槍と短刀：軍隊と攻撃的解放者をめぐる宮延論争
7. 解放者伝承の解釈の問題

## 1. はじめに

ルワンダ王国は非常に好戦的、攻撃的だったといわれる。20 世紀半ばに宮廷の伝承<sup>1)</sup>を初めて文字化し整理したアレクシ・カガメによれば、「ルワンダ社会の本質的原理は Banyiginya 王朝の唯一の王のもとに全ての国々を統一することであったから、近隣諸国との間で平和が確立されることは決してなかった。」「状況によっては、王は不可侵協定をある国と結ぶことができた」が、それは「彼の全軍隊を単一の敵に集中するためでしかなかった」(Kagame 1952: 54-55)。

18 世紀初め、ルワンダの西や北西には農耕に基礎を置く小さな首長国群

---

<sup>1</sup> 伝承の種類や性格については宇野 2007: 119-23 を参照。

が展開し、北・東・南側にはルワンダと同じような牧畜民が支配する一連の国家群（北の Ndorwa、東の Mubari, Karagwe, Gisaka, Bugesera、南の Burundi）があった (Vansina 2001: 141ff)。これらの諸国のうちで、ルワンダだけが「世襲的国民皆兵制」とでも言うべき独自の制度とイデオロギーを作りあげていった。全ての男子が少年のときから軍隊に属し、父親のいた隊に息子も入った (Kagame 1952: 17-79; idem 1963; Vansina 2001: 80-84, 98-106)。

さらに Cyirima II Rujugira (1770-1786)<sup>2)</sup>以降、軍隊の増強と並行して、軍隊の成員が所有する牛も軍隊に対応する「牛軍」(armée-bovin。カガメの造語)に配分され、全ての男子と牛が王のもとで統制される軍事=政治システムが作られた (Kagame 1961; Nkurikiyimfura 1994: 44-64)。

18-19 世紀のルワンダが恒常的な臨戦態勢をとり、「軍隊組織がルワンダ

---

<sup>2)</sup> 殆どのルワンダ王の在位期間は同定が難しく、研究者の意見が違ふことが多い (Nkurikiyimfura 1989)。本稿では Vansina (1962: 56; 2000: 414; 2001: 260-263, 268) に従った。以下に本稿に名前が出てくる王の没年（±表示のもの）または在位期間をあげておく。

Nsoro I Samukondo (1458±14)  
Ruganzu I Bwimba (1482±12)  
Cyirima Rugwe (1506±10)  
Kigeri I Mukobanya (1528±12)  
Mibambwe I Mutabazi (1552±14)  
Yuhi II Gahima (1576±16)  
Ndahiro II Cyamatare (1600±18)  
Ruganzu II Ndori (c. 1650?-?)  
Mutara I Semugeshi (1648±22)  
Kigeri Nyamuheshera  
Mibambwe II Gisanura (c. 1700-?)  
Yuhi II Mazimpaka (c. 1735-?)  
Karemera Rwaka (1766-70)  
Cyirima II Rujugira (1770-1786)  
Kigeri III Ndabarasa (1786-1796)  
Mibambwe III Sentabyo (1796-1801)  
Yuhi IV Gahindiro (1801-?)  
Mutara II Rwogera (1845-1867)  
Kigeri IV Rwabugiri (1867-1895)

の社会制度の基礎」(Kagame 1952: 20)であったとすれば、植民地化以前のルワンダ社会を軍事の観点から捉え直してみることは必要な作業であり、またおそらく有益な作業でもあるだろう。

本稿はその手始めとしてルワンダの各種の対外攻撃活動とりわけ「解放者」の制度について伝承を整理してみる。

## 2. 遠征と略奪

Cyirima II Rujugira の時代に国境警備軍が常設され、辺境の行政区がその指揮下に置かれた。隣国に面する国境駐屯地 (*gereero*) には生垣を幾重にも巡らし、時には環濠を掘り、内部に兵舎を建てた。国境警備軍の司令官は駐屯地に常駐する義務はなく、多くの場合、現地は代理の指揮官に任せた。国境警備軍の司令官あるいは一般に軍の司令官を都に住まわせるのは、監視が容易だからである (Kagame 1952: 52-53; Kagame 1963: 10; Vansina 2001: 105)。

外交は王の特権で、国境軍の指揮官が王の許可なく外国と関係をもつことは禁じられた。国境の司令官はスパイ (*tasi*) を使って隣国の情勢を探った。スパイは宮廷直属で、任務に就く前に忠誠を誓って *gihango* (宮廷の秘典専門家が作った呪薬) を飲んだ。王が遠征を計画する際は、関係地域の国境司令官とスパイを招集した (Kagame 1952: 55-57)。

遠征には2種類ある。第1は公式の遠征 (*igitero*, *expédition officielle*) で、君主としての王が決定し、遠征将軍が指揮し、秘典に規定された儀礼を伴う。第2は武装侵攻 (*agatero-shuma*, *incursion armée*) で、限定的な目的のために王個人や国境の司令官が行い、通常2日以内で戻る (Kagame 1952: 57-58)。

現実には、短期の出撃はもとより、「国の名誉をかけた」遠征の場合も、目的は略奪のことが多かったようである。もとをただせば、王は牧畜民を攻撃して牛群を略奪する山賊の親玉のようなものだったといわれるが (Vansina 2001: 75)、18-19世紀になっても諸国間の軍事衝突のかなりの部分は領土

というより牛、女、その他の財産の奪い合いであった。ファンシナが指摘するように、伝承で「勝った」「征服した」といわれる軍事行動が実際のところ長期的な支配を伴う征服なのか、単なる略奪なのか判断しにくい (Vansina 2001: 71-72)。「征服」したはずの国を後でまた「征服」している場合などは、略奪に近かったと思われる。

実際、軍長たちは戦闘の前に部下の中から数百人の戦士を選び、牛を略奪し、保護し、野営地まで連れて帰る役目を与えた。彼らは弓の他に牛を追う棒を持ったので、棒使い (*Abakoni*) と呼ばれた。棒使い以外の戦士は棒使いを敵から守るのが仕事だが、軍長が敵の不在を確認した時には彼らも略奪に加わった (Kagame 1952: 66)。

各戦士には武装したバフツの護衛隊が付き従っていた。主人と同等の訓練を受けており、戦闘に参加して主人を守り、負傷者や死者を後方に運ぶのが主な役目だが、余裕があれば一部は牛の略奪に回った (Kagame 1952: 23-24)。これらの戦闘員の他に、バフツの部隊に対応するリニジから順番で大勢の食料運搬人を軍長が徴発した。彼らは国境を越えると *Ibitsimbanyi* (無規律) と呼ばれる非正規部隊を構成し、食料などを略奪したが、戦士は手練れの部下をその護衛に付けた (Kagame 1952: 61-63)。

さらに王が国軍の一部または全体を遠征に動員する際、部隊毎に一定数の兵を予備に待機させた。遠征が数次にわたることを考えてとカガメは言うが、この戦士たちは、次の動員にすぐ対応できるという条件で、先発の遠征に自由参加できた (Kagame 1952: 61)。目的は略奪以外には考えにくい。軍の末端単位はリニジ (父系出自集団) で (Kagame 1952: 17; id. 1954: 90)、リニジの長がそのメンバーの出陣の順番を管理した (Kagame 1952: 61) というから、待機戦士の自由参加も個人単位ではなくリニジ単位で行われたのであろう。

さて、遠征将軍 (*umugaba*、原義は「将軍」) は宮廷の腸ト官たちが、去勢されていない雄牛か雄羊の内臓から神託を読み取って指名した。この指名が最終決定で、選ばれた人が軍長かどうか、どのクランか、軍事的才能がある

ないかは問題にならない。彼は軍事行動に付属する呪術的なお守りに過ぎないが、この手続きを経ていない軍事遠征は、たとえ王自らが指揮しても、すべて私的な武装侵攻である (Kagame 1952: 58)。

王は遠征将軍にはなれない。しかし Kigeri と Mibambwe の王号をもつ王の場合は、単なる軍長としてなら、自分の親衛隊を率いて遠征に参加することはできた。Cyirima, Mutara, Yuhi の王号を持つ者が戦争に行くことは、いかなる場合であれ禁じられていた (Kagame 1952: 59)。

遠征の庇護者として過去の王が占いで指名された (d'Hertefelt et Coupez 1964: 162-163)。遠征将軍は、庇護者の王号と個人名を自分の王号として自分の個人名の前につけた (例えば、Kigeri III Ndabarasa を守護者とする遠征将軍の個人名が Rubuga なら、将軍名は Kigeri III Ndabarasa Rubuga となる)。遠征将軍は王の特権と権力の全てを享受した。行軍中の訴訟は彼が最終判決を下し、死刑の判決も下せた (Kagame 1952: 58, 59)。

国境に達すると、遠征将軍は軍長とスパイを集めて作戦会議を開き、スパイの先導で攻め込んだ。攻撃予定日は事前に宮廷に知らせる。宮廷では、軍隊が出発してから帰還するまで毎日儀礼を行っているが、攻撃当日は特別体制をとり、日の出から日没まで、王と王母が不動の姿勢で座り続ける。頭を後に反らす動作は、兵士の逃走を促すので、特に避けねばならない。王権を象徴する雄牛たちも王宮内で出来るだけ動かないようにさせ、王権太鼓の Karinga も普段とは違う姿勢をとらされる。遠征将軍も前線司令部で不動の姿勢をとる。戦闘に立ち会っている軍長たちも戦士たちに護衛されて同じ儀礼を行うが、戦闘継続中だけでよい。参戦中の王は儀礼をいっさい行わない (Kagame 1952: 63-65)。

現在公表されている王朝秘典には戦争関係の「道」が五つある。略奪目的の公式遠征の儀礼の手順を扱った「戦争の道」、戦利品 (敵国の王の擧丸) の処理に関する「太鼓の飾りの道」と「太鼓の七つ目の飾りの道」、国境で敵を呪詛する「国境争乱の道」、ブルンジ王の死霊の祟りを避ける「避難の道」である (d'Hertefelt et Coupez 1964: X-XIV)。

「戦争の道」の最初の数行は「外国が反乱し（＝ルワンダに敵対的になり）、反乱者が王位につき、彼を讃える太鼓が鳴る時、全てのクランで占いをさせる。その前に、遠征将軍を指名する」（1-5行）というように、敵対する王への攻撃を匂わせるが、その後は敵を呪術的に押さえ込む強い言葉がなく、「あの国の槍の力を弱めて、わが戦士を無傷で守れますように」（203-204行）といった大人しい呪文が続き、最後は「一日が終わり、戦士たちが戻り、あの雄牛を放牧場に戻し」「王が身につけていた魔法の草をはずすと、もう好きにして良い、あの国に勝った」「魔法の草を焚き火から遠ざけ、全てを掃いて捨てる」で終わっている（236-247行）。この場合の「勝った」が「略奪して無事に帰った」という意味であることは明らかである。

### 3. 征服と解放者

他方、カガメによれば、併合を目的に遠征する時には、それに先だって攻撃的解放者 (*umucengeli*) を送ることが絶対に必要である。攻撃的解放者は、王の血で買った土地を併合する権利をルワンダに与えるために、王の代わりに戦場に行って自分の血を自発的に流すよう神託によって指名される。逆に外国によって独立が脅かされているルワンダを救うために、王の代わりに自分の血を流すよう神託で指名された英雄を防衛的解放者 (*umutabazi*) と呼ぶ (Kagame 1952: 78-79)。

「解放者」という訳語はカガメ以前から使われていたが、*-cengeli* と *-tabazi* をそれぞれ「攻撃的解放者」、「防衛的解放者」と訳し分けたのはおそらくカガメが最初で、以後これが踏襲されている。攻撃的解放者という訳語は変だということで、Bernardin Muzungu (2003: 334) は *-cengeli* を *martyr de la nation* 「国・民族に殉じた人」と訳したが、これも漠然としすぎだろう。*-cengeli* の語源は *-céenger-* 「侵入する」「巧みに入り込む」 (Coupez *et al.* 2005: 300) で、*-cengeli* は「巧みに入り込む人」「目的を察知されずに敵地に入り込んで殺される人」という意味のようだ。実際、攻撃的解放者の血は自国で流されてはならず（自国で流れたら集めて敵地に運ばねばならない）、必

ず敵地で敵の手にかかって流されなければならなかったから、敵地に「巧みに入り込む」ことが絶対必要であり、これが攻撃的解放者と防衛的解放者の大きな違いだった。

カガメが防衛的解放者と訳した *-tabazi* のほうは、動詞 *-tabaar-* が「助ける」「保護する」「戦争に行く」「自分の国のために命を捧げる」という意味を持ち、それを実行する人が *-tabaazi* 「助ける人」「救済者」「戦争に行く人」「男子の新生児（大きくなれば全員戦争に行くから）」、そして特別の意味として「国のために死ぬ人」「国の救済者」である (Coupez *et al.* 2005: 2390, 2392)。だから例えばパジェは防衛と攻撃の両方の意味で *abatabazi* を「解放者」と訳している (Pagès 1933: 114, 115, 131)。*-tabazi* は攻撃的と防衛的の両方の解放者を指すことも多いが、防衛的解放者と区別して攻撃的解放者を *umucengeri* (巧みに入り込む人) とか *umutabaazi w umucengeri* (巧みに入り込む解放者) と表現できるのに対し、防衛的解放者には *umutabazi* しか言い方がないようである。

カガメによれば、攻撃的解放者を必要とするのは、王の称号と王権太鼓を持つ君主を攻める時だけである。そのような君主を殺せるのは、意図を明確に告げて神意を確かめた後に行う正式の国家的遠征によってのみである。なぜなら王の血は神託を得た後でなければ流してはならないからである。だから略奪目的の遠征や攻撃では、王の称号を持つ外国の支配者の命を狙ってはならない。王ではない土着支配者 (*umuhinza*) は神聖ではないので、儀礼的配慮は必要ない (Kagame 1952: 78–79)。

外国の併合は、短期的には王権太鼓の捕獲によって、長期的には王家の根絶によって法的に完遂される。外国の王の死体から切り取った戦勝記念品 (擧丸) は、ルワンダの王権太鼓を飾る (Kagame 1952: 75, 79; Kagame 1963: 44 n.1)。

以上が遠征、略奪、征服関係のカガメの正統的なテキストのかなり詳しい要約である。王朝秘典には、戦勝記念品の加工法を微細に説明した「道」が二つも存在するのだから、敵王を殺すのに不可欠な攻撃的解放者を扱う秘典

があっても良さそうだが、その存在は知られていない。しかし「即位の道」によれば、王の即位儀礼で Tege の儀礼王が「お前が必要とされる時、太鼓のために自分の血を失うか？ 太鼓のために死ぬか？」と尋ねると、新王は「私は太鼓のために自分の血を失います、私は太鼓のために死にます」と答える (d'Hertefelt et Coupez 1964: XVII, 146-147; Kagame 1972: 60)。また、敵の王を殺すということ（裏返せば味方の解放者を敵が殺すということ）が呪術的に極めて危険な行為だと考えられていたことは、ブルンジ王の死霊の祟りを避ける「避難の道」からも十分に察しがつく。

この場合、ブルンジ王は自然死であれ病死であれ、向こうが勝手に死んだのであるが、それでも、死霊が襲ってくると信じられたのである。ブルンジ王の死をスパイたちが知らせてくると、王は女とは寝ず、幼い男の子と寝る。王権太鼓は Cyirima 祠に運ぶ。Tsobe の儀礼王が供え物を持って霊たちに加護を祈る。王は占いで指定された所に行く。二つの沼か二つの川を渡り、窪んだ場所に八日間潜んだ後、九日目に宮廷に戻る (d'Hertefelt et Coupez 1964: 192-197)。

#### 4. 破邪と浄化

王朝秘典の「国境の戦乱の道」は国境で敵を呪い負かす方法を扱っている。

「国境の戦乱の道」（要約。カッコ内は私の説明）

国境で戦乱が起きると、Shambo クランの Sigari リニジ（ここしか登場しない）の下級の儀礼専門家を招集する。Tega の儀礼王が彼らを率い、*duha* の木 (*Euphorbia candelabrum*、ここしか出てこない) を切って太鼓を作る。彼らはその木の周りの地面を掘り、根まで全部掘りあげ、その穴の中で *genge* の木 (*mimosaceae*: *acacia hockii*、ここしか出てこない) を燃やして根が再生しないようにする。逆子で生まれた雄牛か、盲目の雄牛（普通は儀礼用には無傷の雄牛を使う）を解体し、肺を取る。その牛皮が乾くと、太鼓に張る。太鼓に牛肺を入れ、太鼓の心臓にする。



Tege の儀礼王は口で指図するだけで、近寄りも触りもしない。太鼓のばちは *kenya* の木（他の道で 1 ヶ所言葉遊びで出てくるだけ）か *huhe* の木（ここしか出てこない）で作る。太鼓は国境に運ばれ、司令部に置かれる。敵が攻めてきて、最初の矢を射ると、それを拾う。最初の槍を投げてくると、それを拾う。太鼓を放棄し、敵に奪わせる。敵の矢と槍を宮廷まで、Cyirima 王の祠まで、あるいは吉と出た場所まで持ち帰る。王は先祖の霊たちにビール、蜂蜜酒、ソーガムのビール、一頭の雄牛、一頭の子供のできない雌牛を捧げ、敵の矢と槍を見せ、敵による攻撃を報告し、Bigabe（上記の偽の王権太鼓）が敵を負かすよう祈る。Tsoobe の儀礼王がこれらの物を持って Rutare の Mutara 王の祠に行く。彼は *igihuna* バナナの切り株、魔法の白蟻の巣を持って行く。牛たちは祠の生垣の中に立っている。彼は種子、飲物を供え、一頭の雄牛、一頭の子供のできない雌牛を捧げ、敵を負かすよう王が頼んでいると告げ、敵の矢と槍を見せる。矢と槍はバナナの切り株に刺し、呪いをかけて、力を鈍らせる。次に Tsoobe の儀礼王はルワンダの矢と槍を研ぎ、その呪力を損なわないため地面に触れないようにして国境に運ぶ。勇者たちは呪力を帯びた矢と槍で敵を攻め、壊滅させる (d'Hertefelt et Coupez 1964: 186-191)。

太鼓の材料となる植物は、他の儀礼では出てこないものばかりで、それ自体が非常に不吉な植物のようだが、さらに大地とのつながりを断って、太鼓を徹底的に不毛な呪物に変える。太鼓の皮と心臓に使われた逆子や盲目の雄牛は *-mara*, *-mazi* と一般に呼ばれる奇形の人間や動物の範疇に入る (Coupez *et al.* 2005: 1475, 1483)。その種の存在には、植民地時代の神父たちが繰り返し言及している。

Pagès によれば、ローマ時代の *monstra* や *portentà* などと同様、ルワンダでは奇形 (*monstres*, *ibimara*)、その他類似の不幸な人たちは、「致命的な作用をする邪悪な原理や危険な神秘力を彼らの内部に持っている」(Lévi-

Bruhl 1922: 58 et ss.) と考えられている。だから敵の侵略を阻止するために、これらの異常者を侵略者の攻撃にさす習慣があった。彼らの血の流らないし彼らの存在自体が呪いであると考えられた (Pagès 1933: 404)。さらに秘典専門家のクランの一部 Basingo は、「呪詛者 (Abahenyi)」と共に、架空ないし現実の異常者を総動員して敵に対して「道をふさぐ」(*gukingir' ab-abisha*) ことを担当した。それらの存在は疫病神とされ、*intsiro* と呼ばれたが、特に古い師によって内臓が「黒い」つまり敵にとって不利であると判断された黒い山羊や黒い鶏、未婚の母 (*ibinyandaro*)、私生児、親の喪中に生まれた子供 (*umuwana w'ambi*)、胸が大きくなりえない若い女性 (*impenebere*)、子供を一度も生まずに老いた女性、そして *ibimara* ないし *ibimazi* と総称されるその他の見かけ上あるいは現実の奇形者 *monstres* であった (Pagès 1933: 404, 459, 460)。同様に de Lacger によれば、この種の人々の汚れた血は、戦闘中に敵を苦しみ、麻痺させる。だから人々はこれらの醜い存在を戦いの前線に配置し、敵の一撃を最初に受けた彼らの血が敵に跳ね返って敵を負かすようにする (de Lacger 1959: 248; cf. Bourgeois 1956: 159)。

平時でも、公共の悪、国にとって災いの種と見なされる存在はルワンダから厄介払いされる。親の監視をかすめて妊娠した娘は殺される。評判が立つ前に、墮胎するか、誰かが急いで彼女と結婚すれば彼女は助かるが、赤ん坊は殺される。妊娠中に女性を国境に向かわせ、国境で出産させ、赤ん坊を殺して国外に捨てる。姦通は未婚の母よりずっと多いが、これは問題にされない。一定の年齢に達しても胸が全く発達しない若い女性 (*imhenebere*) や月経のない女性 (*imha*) は国全体に悪影響を与えるので、宮廷はこの問題に特別の関心をもつ。娘の異常を知らせるのは母親の役目だが、*kwohera* という特別の儀式を行って娘を特別の淵に沈めるのは宮廷に直属する役人である (Kagame 1954: 301; de Lacger 1959: 248, note 1; Arnoux 1912: 291 note 2)。

この役人は *Impara* という集団で、宮廷で *Ryangombe* の憑依祭祀を行う。その長は「Imandwa たちの王」(*mwami w'Imandwa*) と呼ばれた。この祭祀を宮廷で行う際、王は *Ryangombe* の前で跪けないため参加せず、代わ

りに Shambo クランのツチの Yumbu リニジから「Imandwa たちの王」を任命した。Impara たちは純粹の、あるいは貴族化されたバフツで、バトゥワとともに吟遊詩人でもあり、王宮で夜に護衛にも立ち、王の起床時には、手に鈴かガラガラを持ち、野ウサギのしっぽを頭に乗せて左右にバランスを取りながら歌い踊り、Ryangombe たちの加護を大声で叫んだ。

さらに彼らは、王と王国の浄化役も兼ね、人や動物の疫病が流行ると浄化儀礼を行う。また胸のふくらまない女性や未婚の母をはじめ、病気、飢饉、害虫などの原因として占い師が告発する異常な存在、奇形者、障害児、アルビノ (*abema*) などを王国から取り除く。国境まで彼らを護送し、同行する Batwa (死刑執行人) には羊、*ahennyi* (呪詛者) には山羊、自分たちには若い雄牛を食料として用意する。奇形者は Kagera 川に投げ込まれ、よその国に流されていく。未婚の母は Kivu 湖の無人島に置き去りにするが、彼女たちの泣き声を聞いた人が連れ帰って召使いにすることもある。帰り道、Imandwa たちの王は同行者全員を水で清める。Impara はまた、反乱者、謀反人などに亡命ルートを示す役目をもった。しかし王が誰かを追放しようとしていることを察知すると、多くの場合、そういう人は Impara に導かれるのを待たずに自分で国境を越えることが多かった (Arnoux 1912: 291-292; Pagès 1933: 388-389; Delmas 1950: 95-96)。

王朝秘典における Impara の登場の仕方を見ると、笛吹きたちと一緒に歌い踊る時 (「Gicuraasi の道」「水飲み場の道」「戦争の道」「王位継承争いの道」と、Rembo たちと一緒に淫雨や家畜の病気を止める役を果たす時 (「洪水の道」「家畜の病気の道」) がある (d'Hertefelt et Coupez 1964)。この Rembo (Ndiza の Burembo の住民) は戦時に敵を呪詛してその抵抗力を奪う呪術を行うので Abahennyi (呪詛者) ともよばれる。彼らは夜に Ihenero (<*gehena* 「呪詛する」) の森に集まって黒い山羊を殺し、皮を茂みに吊し、棘のある低木の実を首につけ、敵の通る道に魔法をかける (Pagès 1933: 395-396)。あるいは、軍隊に付いて行って敵に向かって呪文を投げかけたといわれる (d'Hertefelt et Coupez 1964: 486)。

このほか、制度化された人身御供の血が国境に送られた。Bukunzi（現ルワンダ西南部にあったフツの小王国）の Bayombo クランと Bachuku クランは、かつて Ruganzu Ndori を侮辱した償いに若い男女をルワンダ王の交代毎に差し出さなければならなかった。宮廷の使いは、Ndori が最初の復讐を行った Nyakafunzo の沼で、Bayombo の生贄の男の脇の下を短剣で刺して殺し、血を木製の壺に入れて国境に運び、隣国に呪いをかけてまき散らした。Bachuku の若い女子は Nyabarongo 川の最初の支流の流域にある Bumbogo という聖なる国に嫁にやられ、モロコシとシコクビエを栽培し、その初物は毎年 1 回盛大に都に運ばれる (Pagès 1933: 294-298; de Lacger 1959: 249)。

## 5. 解放者の伝承

解放者については *ibiteekerezo*（歴史説話）などの口頭伝承が主な情報源である (Pagès 1933, Kagame 1972, Coupez et Khamanzi 1962, id. 1970, Smith 1975)。便宜上、ここでは、古い時代に割り当てられている事例から順に挙げていく。

### 〔事例 1〕Nsoro I Samukondo 時代の解放者 Rwambali

秘典専門家たちは Nsoro I Samukondo の時代に Tsobe クランの Rwambali という人が Ndorwa 王国に対して攻撃的解放者として死んだという (Kagame 1972: 53; Kagame 1959: 84; Kagame 1963: 27)。

Nsoro I Samukondo は神話的先祖 Kigwa から数えて第 21 代、「帯の王」の最後（第 11 代）の王である。解放者としての Rwambali に言及しているのはこの文章だけである。Tsobe クランの系図を見ると Rwambari<sup>3)</sup> は Nya-

---

<sup>3)</sup> ルワンダ語の綴りは基本的に原著者の綴りを使う。たとえば Rwambali と Rwambari は同じ人物である。

ruhungura の息子である (Delmas: 108)。カガメによると Nyaruhungura は、Nsoro I Samukongo の息子 Ruganzu I Bwimba が王母に後見されていた時期の秘典専門家の筆頭、つまり王、王母に次ぐ高官である (Kagame 1972: 57)。

Tsobe クランの Rwambali という解放者は複数いて、Mibambwe II Gisanura の時代 (事例 9) と、Yuhi IV Gahindiro の時代 (事例 19) に出てくる。

次の解放者は、Nsoro I Samukondo の息子と娘の Ruganzu I Bwimba (「説話の王」の初代) と Robga である。

## **[事例 2] Ruganzu I Bwimba と Robwa**

Nsoro I Samukondo の時代に東の Gisaka の Kimenyi 王が Nsoro の王女 Robga に求婚した。結婚して産まれる男子がルワンダを征服すると占い師たちが予言したからである。Nsoro も自分の占い師から同じ予言を聞いていたので、断った。Nsoro が死ぬと、Kimenyi はまた求婚した。父から事情を聞いていた Bwimba は反対だったが、母と母方オジが乗り気なので、譲歩した。Robga は嫁入りするが、Bwimba と相談して、妊娠したら自殺すると約束し、Bwimba も占いの通り Gissaka で殺されて呪いの血を敵地に撒くことを約束した。Robga から妊娠の知らせが来ると、オジと一緒にいくよう誘ったが、断わられたので、王は 1 人で出発した。国境で彼は後継者の誕生の知らせを待った。知らせが来た後、王は豹に出会って槍で刺し殺し、皮を赤ん坊に着せるように言い、子供を Rugwe (豹) と名付けた (後の Cyirima I Rugwe)。敵地に入ると狩人とけんかをし、狩人に射殺された。お供のトゥワが Robga に知らせに行き、Robga は太鼓の上に飛び降りて胎児と一緒に自殺した (Pagès 1933: 114; cf. Coupez, A. et Th. Kamazi. 1962: 86-103; Kagame 1972: 57-59)。

この話は異伝が多い。ド・ウーシュは、解放者を論じる時にはいつもこの

Ruganzu I Bwimba の伝説を使ってきた (de Heusch 1966: 253; 1982: chap. II, II, V)。2 人の解放者は敵国に入って死んでいるが、敵国を征服するためではなく、ルワンダを守るために死んだのだから、2 人とも防衛的解放者である。

Robga の結婚の背景にある「姉妹の息子の危険性」のモチーフは、解放者の伝承に繰り返し出てくるばかりでなく、東アフリカの大湖地方の諸王国に広く見られるが、北部と南部で対処法が違ったようである。つまり、南部のルワンダの周辺（北は Nkore あたりまで）では、姉妹の息子との結婚を許す。上例 2 のように外国の王がルワンダの王女に求婚する場合と、逆に、敵国の王女を娶って生まれた息子に（解放者として）征服に行かせる場合がある。いずれにせよ、「いかなる王朝も、その血を引く戦士とりわけ解放者に攻撃された時には抵抗できないと信じられていた」(Kagame 1972: 148, 58, 85, 156)。

これに対し北部では王女の結婚自体を禁じた。アルバート湖の東のブニョロ Bunyoro 王国では、王の娘は結婚することも子供を産むことも禁じられた。理由は、王にとって姉妹の子供を見るのは不運だろうから、というものだった。これは男性と父方の女性親族（典型的には母の兄弟と姉妹の息子）の関係についての彼らの考えと一致している。つまり姉妹の息子は母の兄弟を「支配」する。さらに母の兄弟にとって儀礼的な危険の源泉であるともいう。王との関係で誰かがそういう立場を占めるのは不適切である。ニョロ神話では Bukuku 王は彼の姉妹の息子に殺され、王位を奪われた (Beattie 1971: 101)。

ブニョロの東隣のブガンダ Buganda でも、姉妹の息子は王にとって潜在的に厄介な存在だった。王女は結婚することも子供を産むことも許されなかった。男遊びは自由に出来たが、妊娠したら、流産させられた。もし子供を産んだら、彼女も相手の男も殺された。王が近隣の王国の王女を娶ることも慣習で禁じられていた (Roscoe 1911: 85-86)。

次の解放者は Ruganzu I Bwimba の曾孫の Mibambwe I Mutabazi である。彼および彼の父の Kigeri I Mukobanya の時代に、北方からブニョロ軍

が2度にわたって略奪に来た。事例3は第1次、事例5は第2次のブニョロ戦争に関わる。

### [事例3] 第1次ブニョロ戦の Sekarongoro 王子

Kigeri I Mukobanya の時代に北からブニョロ軍が攻めてきた。Musave (現 Rubungo) の戦いで Sekarongoro 王子 (のちの Mibambwe I Mutabazi) は額に負傷した。彼は防衛的解放者として出陣したのではなかったと思われるが、後に彼の流した血は対ブニョロ戦争の決定的要素と見なされるようになり、彼には Mutabazi (防衛的解放者) という仇名がつき、徐々に本名に組込まれた (Kagame 1972: 73-74)。

次の事例3bも王子時代の Mibambwe I Mutabazi が防衛的解放者になった話を含むが、呪術的な防衛戦の戦法の一覧表になっており、「4. 破邪と浄化」で扱った *-mara*, *-mazi* (異形の存在) がいくつも出てくる。

### [事例3b] 第1次ブニョロ戦の Sekarongoro 王子 (=Mibambwe I Mutabazi)

ルワンダ王 Kigeri I Mukobanya とその西南のンドゥガ Nduga (現ルワンダ中部) の土着の王 Mashira は平和に共存していた。ブニョロ軍の攻撃を受けた Kigeri I Mukobanya は偉大な呪術師 Mashira に撃退法を尋ねた。Mashira 王は10の秘策を教えた。即ち：

- (1) 子供を生めない女性 (*igichambyaro*) の体に刺し傷をつけ、彼女の血と黒い雌牛の血を混ぜ、敵に振りかける。
- (2) 王の女奴隷 Nyirassuna が早産した双子を母親と共に敵前に曝して殺されるようにする。
- (3) Nsoro の家の乳房の発達していない娘 Nyiragasi がいる。彼女を渡すよう彼女の父親に言う。もし断られたら、彼女を奪い、矢を使って彼女の右胸を軽く刺し、その血を彼女自身が手でバニョロたちにあびせる。

- (4) 一羽の雄鳥の喉を掻き切って殺せ。その内臓が白くならないとき、雄鳥は魔法をかけるのに使える。それをミルク壺に入れ、一握りの石膏で白くなった清めの水を注ぐ。魔法の成分のある何枚かの葉で全体を混ぜる。この壺を先に立てて進めば、勝てる。
- (5) 所有者が死んで朽ち果てた家の残骸を燃やして煙が敵に向かうようにする。
- (6) 蛇とその子供を捕えて殺して薄切りにし、新品の壺に入れて煮る。壺を道路上に置く。敵が見つけて食べると魔法にかかる。
- (7) 白い雌雄の牛を山頂で殺す。ハゲタカ、ハイタカ、カラスが寄ってくる。死骸を食べながら、鳥たちは時々空を飛び、敵はそれを見て驚くだろう。
- (8) Mibambwe の息子が Mibambwe の家のバナナビール醸造用の穴に隠した黒色（赤色とも言う）の雄羊の喉を掻ききって殺す。内臓は白くなるだろう。それを戦場で Kigeri の息子 (Mibambwe?) の近くに置くと、勝利を得るだろう。
- (9) これらをやり終える頃、大雨が降って敵は弓が使えなくなるだろう。ルワンダ軍は槍を使って有利に戦うことが出来る。
- (10) Kigeri I の息子 Mibambwe Mutabazi は敵と戦いに行かねばならない。解放者になるのだ。彼は額に矢で軽い傷を負うだろう。その血を彼は敵の方向にまき散らす。これで全てはルワンダに有利になるだろう (Pagès 561-572)。

事例 3b で偉大な呪術師 Mashira が破邪儀礼を防衛的解放者と組み合わせていることに注意したい。ド・ウーシュは異形者 *-mara*, *-mazi* を防衛的解放者ではなく攻撃的解放者に重ね合わせて論じているが（特に de Heusch 1986: chap. V）、それでは攻撃的解放者の性格を捉え切れない。

次の事例 4 はルワンダ側の時代設定は事例 3b よりも後で、話の冒頭で Mibambwe I Mutabazi はすでに王になっているが、Nduga 側は Mashira



の父の Nkuba 王の時代になっていて、世代が事例 2 とずれている。Cyirima II Rujugira (1770-1786) の宮廷で鍛冶屋の Mhabura が詠んだ詩では、Mashira に対して Gatambira が解放者として送られたとしている (Kagame 1969: 218-219, 3 行目以下)。

#### [事例 4] Mibambwe I Mutabazi の Nduga 攻めの解放者たち

(a) Mibambwe I Mutabazi は、Nyabarongo 川を西に渡って Nduga を攻めた。Nduga の王は、Ababanda クランの Sabugabo の息子の Nkuba だった。Kigeri I Mukobanya の息子（つまり Mibambwe I Mutabazi の兄弟）の Nkoko 王子が攻撃の解放者として殺され、ルワンダ軍は Nkuba 王を倒した。(b) Nkuba の息子の Mashira 王子は Bugesera 国に逃げ、Nduga 国はルワンダ領となったが、長い日照りが続いた。その後、Mashira が帰国すると雨が降り始め、Mashira と Nduga 人はルワンダ人を追い出した。両国の戦いが再開され、Nduga の再征服のために自発的に死んだルワンダの解放者の中には、王の息子の Gatambira 王子（母は Abega クランの Shetsa）、王の息子の Gahindiro 王子の息子の Mihira、そして Nduga 王の側近だったが仲違いしてルワンダに亡命した Munyanya がいた。この男は復讐心から解放者になったと言われる。(c) 他方、Mashira の息子の Ngoga 王子の率いる Nduga 軍はルワンダに侵攻し、Nyabarongo 川の東まで達したが、王子は戦死し、Nduga 軍は敗退した。(d) しかしルワンダ側も Nduga を再征服できなかったため、Nduga の王家の復活を認めざるを得なかったが、将来の再征服のために呪術的な手を打った。つまり、Mishira を滅ぼすための呪術的な贈物（角のない黒い雌牛など）を持たせて娘の Nyirantobwa 王女を Mishira に嫁がせた。同時に、Mashira は、もともとブルンジの高官の息子に嫁がせる予定だった娘の Bwiza を Mibambwe の息子の Gahindiro 王子に嫁がせた (Kagame 1972: 75-77)。

(b) で Mashira が戻ると干魘が治まったこと、ルワンダが何人も解放者を送っても Mashira を殺せないのは、Mashira が偉大な呪術師であり、また彼に正統性があるからということなのだろう。(c) で Ngoga 王子がルワンダ領内で死んだのは、Nduga 側から見ての攻撃的解放者のようにも思われるが、カガメはその可能性には触れていない。(d) でルワンダ側が王女に異常（角のない）で汚れた（黒い）雌牛を持たせて嫁がせたのに対し、Mashira が呪術的に何の対抗策も講じていないのはやや不自然である。「姉妹の息子」の危険については、王女が両方向に嫁いで相打ちの形になっている。

#### **[事例 5] 第 2 次ブニョロ戦争の Forongo 王子**

(a) Mibambwe I Mutabazi の時代に、ブニョロが再び攻撃してきた。王は人と牛をすべて連れ、娘婿の Mashira 王の Nduga 王国を横断して Kivu 湖の西の Bunyabungo (Bushi) 国まで逃げた。同国の Murira-Muhoyo 王は彼らを受け入れた。ブニョロ軍が追ってきたため、Mirambwe の息子の Forongo 王子が解放者に指名されて最初の戦いで殺され、ルワンダ軍はブニョロ軍を追い払った。(b) しかし Murira-Muhoyo 王がルワンダ軍を攻撃し、王母が殺された。そこで Mibambwe は帰途について、(c) Nduga 国で娘婿の Mashira 王と彼の息子たちを皆殺しにし、Nduga を再征服してしまった (Kagame 1972: 78-80)

前半 (a) の Forongo 王子がブニョロに対する防衛的解放者として死んだという話は特に問題はなかろう。(c) で Mashira 父子を殺して Nduga を奪う前にルワンダ側が解放者を出していないのは理論的に問題があるが、カガメは何も言っていない。

#### **[事例 6] Bungwe 王の子供 Binama が Bungwe 攻めの解放者になった。**

(a) Yuhi II Gahima は、ルワンダの西南の Abenengwe クランの小王国連合を束ねる Bungwe 王国を攻めて失敗し、呪術的な方法で征服しよう

とした。彼は、Bungwe 国の Samukende 王の妻の Benginzage の妹の Nyankaka と結婚した。そして、姉に会いに行くという名目で妻を Samukende 王の宮廷に行かせたが、真の目的は妻に Samukende 王を誘惑させることだった。Samukende 王の子供を妊娠すると、Nyankaka はルワンダに帰り、男の子を産んだ。法的父親である Yuhi II Gahima は彼を Binama と名付けた。子供は Bungwe 王国に対する解放者になるよう運命付けられており、彼の介入は絶対に失敗しないと信じられた。なぜなら、いかなる王朝も、その血を引く戦士とりわけ解放者に攻撃された時には抵抗できないと信じられていたからである (Kagame 1972: 85)。(b) ルワンダはその後しばらく連合王国を攻める機会がなかったが、Yuhi II Gahima の曾孫の Mutara I Semugeshi の時代に、連合王国を構成する小王国の 1 つ Bufundu が国境地方を略奪したので、その報復として連合全体を攻めた。Bungwe 王国を攻撃するに先だって、Binama 王子が解放者として殺された。ルワンダ軍は Bungwe 国の Rubuga 王 (Semukende の子) と王母の Bebgibzage (別名 Nyagakecuru) を殺し、王権太鼓を捕獲した (Kagame 1972: 109–110)。

これは「姉妹の息子の危険性」の変形と見る事が出来よう。神託に指名された解放者が Rubuga 王を滅ぼしたという伝承は、Cyirima II Rujugira の宮廷で鍛冶屋の Mhabura が詠んだ詩で言及されている (Kagame 1969: 226–227, 112 行目)。

次の事例は Bunyabungo 国に侵略されて殺され、国も奪われた Ndahiro II Cyamatare が、国を取り戻した息子の Ruganzu II Ndori の時代に解放者として美化された可能性を示唆している。

#### **[事例 7] Ndahiro II Cyamatare は解放者か？**

Ruganzu II Ndori の時代に Nyrarumaga が作った詩は、Ruganzu II の父 Ndahiro II Cyamatare が国を救うために解放者として死んだこと

を讃えている (Kagame 1951: 128)。

Ndahiro II は、Bunyabungo 国の Muriya-Muhoyo 王の息子 Ntsibura 王子の侵略をうけて殺されたが、彼の死によってルワンダが救われたわけではなく、王権太鼓を奪われ、外国に 11 年間占領されてしまった。この不名誉のために Ndahiro という王号は廃止されたほどである (Kagame 1972: 90–91)。防衛的解放者は目的を達成するのが普通というか、防衛できたから遑って防衛的解放者として認定される傾向がある。その際、事例 3 のように、死ななくても結果が良ければ認定される。Ndahiro も、次の代で国が回復できたので、改めて認定されたということであろうか。結果主義的傾向が強い防衛的解放者に対し、攻撃的解放者の場合は、後に続く軍隊が失敗する例が少なくないが、死ねば結果に拘わらず解放者として認められている。

#### [事例 8] 干魃からルワンダを救った Kibogo 王子

Ndahiro II Cyamatare の時代に干魃のため飢饉が起きた。そのうえ Ndahiro は片目が眼窩から飛び出し、激しく痛んだ。色々試して失敗した後、外国の有名な呪術師に相談したら、神々が国のための身代わりの犠牲 (*inchungu*) として王の息子の Kibogo を要求していると言われた。王子はためらわずに承知した。翌日、Kibogo は一番美しい服を着、槍と弓を持って出発した。彼の妻子、召使たち、そして牛の群れが従った。Gasseke 近くの小さな山の頂上に登って、Kibogo 一行は座った。厚い雲が立ちこめて彼らを包み、神々の所へ連れて行った。こうして宥められた天は豊かな雨を地上に降らせ、ルワンダは元の緑に戻った。Ndahiro の目も直った。Kibogo 王子のおかげで国は救われた。王子は解放者とされた (Pagès: 236–238, cf. 131–132)。

防衛する相手が外敵ではなく災害である例は、他に事例 17 の天然痘がある。

### [事例 9] Milambwe II Gisanura の時代の Rwambali

秘典は Milambwe II Gisanura の時代に Tsobe クランの Bwacya の息子の Rwambali という人が Gisaka 国に対して攻撃的解放者として死んだと伝えている。解放者を送り出したということは、征服の計画や戦闘があったことになるが、詳細は不明である (Kagame 1972: 124)。

Delma によれば、Tsobe クランの Nyarungura の息子に Rwambari と Bwaca がいて、後者の息子が Rusimbi、つまり Rubona (事例 11b) の父である (Delma: 108)。この Bwaca がカガメの Bwacya と同一人物らしい。

事例 1 で触れたように、Rwambali という解放者は 3 人おり、事例 9 は 2 人目である。これに関し、Cyirima II Rujugira の宮廷で鍛冶屋の Mhabura が詠んだ詩に解放者 Rwambali が出てくるのだが (Kagame 1969: 266–267, 112 行目)、カガメは Rwambali は Nsoro I Samukongo の時代 (事例 1) と Yuhi IV Gahindiro の時代 (事例 19) にいて、後者は詩人よりも後の時代だから、詩は前者に言及していると言った (id. 289, note 265)。事例 9 を忘れていたのだが、事例 9 は詩人たちの時代より 3 代前、事例 1 はさらにそれより 10 代前だから、むしろ詩人が言及したのは事例 9 だったのかもしれない。

なおこの伝承について、ファンシナは「戦闘中に Tsobe の有力者が解放者として死んだが、これはルワンダの敗北をカムフラージュする話である」(Vansina 2001: 144) と言っている。

次の伝承は厳密に言えば解放者の話ではなく、呪術的に周到に計画出産された「姉妹の息子」がルワンダ軍司令官になった話である。

### [事例 10] Ndorwa 攻めの呪術的な準備

(a) Ndorwa に奪われたルワンダの旧領地の再征服および Ndorwa の征服は時間をかけて呪術的に準備された。Yuhi II Mazimpaka の時代にルワンダの有力者たちが国外に避難した時、Ega クランの Makara が息

子の Gahondogo と Ndorwa に逃げた。Gahondogo に Gahulira という息子が生まれ、Ndorwa で育ち、言葉も完全に話せた。彼らはその後帰国した。Cyirima II Rujugira は、Ndorwa 王の近親の王女と結婚して男子を産むよう命じて Gahulira を Ndorwa に送った。Gahulira は実際に王女と結婚し、生まれた 2 人の息子 Kamali と Mugozi を連れて帰国した。いかなるリニジも自分の血を引く敵には有効に抵抗できないから、Gahulira の息子の 1 人は Ndorwa との将来の戦争において決定的な役割を果たすよう運命づけられていた。さらに、Ndabarasa 王子（後の Kigeri III Ndabarasa）自身、Ndorwa との関係が良かった時に、Ndorwa の宮廷に滞在したことがある。とげが足に刺さって腫れたために帰国したが、彼の滞在は呪術的な準備的な征服だったと言われる (Kagame 1972: 148)。 (b) その後、Kamali は 4 つの軍を指揮し、総司令官の Ndabarasa 王子と緊密に連携した。彼は、王子が可視的な司令官を務める遠征の呪術的な司令官だった (Kagame 1972: 148)。 彼らは Ndorwa の王を殺し、Ndorwa を征服した (Kagame 1972: 152)。 (c) しかし、Ndorwa は法的には征服されておらず、単に負かされただけだった。なぜなら、正統の王が殺されたということは、殺す前に、ルワンダ人の解放者が（名前は出てこないが）血を流したと想定されるが、王権太鼓は捕獲されなかったからである (Kagame 1972: 157)。

(a) は「姉妹の息子の危険性」に基づく長期作戦を語っており、その結果生まれた Kamali と Mugozi という 2 人の息子のうちの Kamali が (b) では Ndabarasa 王子の呪術的な先兵として活躍し、Ndorwa は滅んだ。（もう 1 人の息子 Mugozi のことは不明。）可視的司令官と呪術的司令官のペアが出てくるのが注目されるが、制度的に頭と幽の將軍の組み合わせがあったのかどうかはわからない。Kamali は Ndorwa 攻めの解放者にはならず、(c) では別の人が解放者になったことが示唆されている。

次は、ルワンダが拡張した Cyirima II Rujugira の時代である。この時期

には敵味方合わせて 10 人以上の解放者の名前が伝えられている。

**[事例 11(a)] Cyirima II Rujugira とブルンジの Mutaga III Sebitungwa との解放者合戦 (1)**

Cyirima II Rujugira の即位当時、ブルンジが最強国で、その王の Mutaga III Sebitungwa 自身が武勇に優れた英雄だった。ブルンジがルワンダの国境警備軍をしつこく攻めた。ルワンダでは Cyirima II の息子で Abalima 軍司令官の Gihana 王子が既に早くから解放者に指名されていた。王子は決死の兵士たちを率いて進撃したが、彼を殺してはならないという指令が行き渡っており、どこへ行っても敵兵は逃げる。彼ほどの地位の解放者の血を流すことはブルンジにとって自殺行為なので、Mutaga III はブルンジ側も解放者を送って Gihana と対抗させ、Gihana の血がブルンジにもたらす不吉な効果を中和することにした。神託は王のいとこの Rurinda を指名した。2 人の解放者が対決した。Rurinda が Gihana を殺して自殺した。この二重の犠牲は大規模な戦いの中で起り、ルワンダ側では他にも Cyirima II の息子の Karara や、王女 Mitunga の息子の Mharaye が戦死した。この 2 人の死は偶然であって、儀礼の手続きを経て準備されていたのではないから、彼らは解放者ではない。

その後、大干魘がブルンジを襲い、Gihana 王子の血のせいだと言われた。解放者として死んだのは彼 1 人であって、反解放者 Rurinda は自分で自分の血を流しただけだから、解放者ではない。神意を尋ねた後、ブルンジ王は巧妙な解決法を見つけた。つまり Gihana 王子の霊魂を騙してブルンジが自分の国だと信じさせるのである。王子のために家を造ってルワンダの彼の家と同じ名前をつけ、軍隊を作ってルワンダの彼の軍と同じ名前と呼び、牛の群れもルワンダの彼の牛の群れと同じ名前にした。そして最後に、彼の家に女性を住まわせ、ルワンダの彼の妻のうちの一番のお気に入りの女性の名前に変えた。こうして Gihana の祭祀が

ブルンジで組織され、ついに雨が降った。彼が満足したからだと言われた (Kagame 1972: 139-142)。

**[事例 11(b)] Cyirima II Rujugira とブルンジの Mutaga III Sebitungwa との解放者合戦 (2)**

この様子はルワンダにも伝わった。王子の霊を正気に戻らせ、彼の怒りを再びブルンジに向かわせるために、Tsobe クランの Rusimbi の息子 Rubona が（自ら申し出てと伝えられる）解放者として死に、あの世で王子に会いに行き、事実を告げることになった。Rubona は秘典専門家の一員であり、国境駐屯軍のひとつの Abadahemuka 軍の司令官としてブルンジ国境を守っていた。彼は解放者として殺され、あの世での使命を果たしに行った。彼が戦死した場所は最近まで遺跡があった。

ブルンジ宮廷は Rubona が解放者として死んだことを知った。その悪影響を中和するため、Mwambutsa II Nyarushumba の息子で Ntare III Kivimira の異母兄弟の Kivumajoro 王子が解放者に指名された。彼は亡命するふりをしてルワンダに入国して Muhanga の塩井で溺死し、ルワンダに牛疫をはやらせようとした。それを中和するため、ルワンダ宮廷は Rubona の親族の Ntabyera を解放者に指名し、彼は同じ塩井で溺死した。2 人の死体は密かにブルンジ領に運んで埋めた (Kagame 1972: 142-143)。

**[事例 11(c)] Cyirima II Rujugira とブルンジの Mutaga III Sebitungwa との解放者合戦 (3)**

大飢饉がブルンジを襲った。ブルンジでは、ルワンダの現王から生まれた Gihana 王子が流した王家の血はブルンジ側の解放者たちの血より強いことから、ブルンジを崩壊から救うには、Gihana 王子に匹敵する王家の血を流して中和しなければならないと結論された。神託が解放者として指名したのは Mutaga 王その人だった。



Mutaga III が護衛の数を減らしたことを知ったルワンダ宮廷は Rubona の息子の Rwambali が率いる Abadahemuka 軍と Gisaka から亡命した Rutanda の Urwasa-bahizi 軍に、ブルンジ王を攻撃して可能なら殺せと命じた。この 2 つの軍は神託によって指名された。神託で吉と出なければ王は殺せないからである。

Mutaga III は Gisaka 亡命軍の司令官 Rutanda の毒矢を額に受けて死んだ。その後、ブルンジ軍は攻めてこなくなった。Mutaga III の後継者の Mwambutsa III Mbonuburundi はまだ幼く、ブルンジはルワンダに昔の不戦協定の復活を求めてきたが、Cyirima II Rujugira は Gihana 王子の死を理由に拒否した。(Kagame 1972: 143-144. Cf. idem 1963: 97-98; id. 1951: 153 n. 219, 156-157; Pagès 1933: 141, 586-596. Vansina 2001: 268 によれば Gihana 王子の死は 1773 年、Mutaga 王の死は 1775 年)

ファンシナは Gihana 王子の死について、「私は解放者という概念は敗北のショックを和らげ王を慰めるためにこの機会に宮廷の儀礼専門家たちによって発明されたのだと思う。宮廷は別の軍を送ったが、これも大敗し、司令官 [Rubona] は「解放者」として殺された。」と述べている (Vansina 2001: 150)。この解釈については後で取り上げる。

#### **[事例 12] Ndabarasa 王子の Mubari 攻めの解放者 Nkondogoro。**

Mubari (Gisaka の北、Karagwe の西。今のアカゲラ国立公園あたり) との戦いで、Cyirima II Rujugira の甥の Nkondogoro が解放者として殺された (Kagame 1969: 271 n. 200)。

ファンシナは、このカガメの短い記述に依って、両軍の間で何らかの衝突があったのだろうと推測している (Vansina 2001: 153)。つまり、王家から戦死者が出て、それを取り繕うために解放者の称号が与えられたということ

は、戦闘があったことを意味するというわけである。

**[事例 13] Cyirima II Rujugira 時代の Gisaka 攻めの解放者 Rubuguza**

Gisaka の英雄 Nzikwoga がルワンダ軍を挑発した。その相手をさせる戦士を王が物色中に、Ababanda 軍（Cyirima II の異母兄弟の Nyarw-aya 王子が司令官）の戦士 Rubuguza が、宮廷の戦士に与えられるべき名誉を希望して僭越ながら自分が一騎打ちに行きたいと申し出た。彼は Nzikwoga に勝ったが、Nzikwoga は逃げた。追跡して Gisaka まで行くと、Gisaka 王が Nzikwoga の命を数頭の牛で買い取るということで、Rubuguza は牛を Cyirima II に届けた。特殊な状況で送られたが、Rubuguza は解放者と見なされた。普通の戦士の解放者である (Kagame 1969: 294, note 288)。

普通の戦士でも有力者層の子弟だから「平民」というわけではないが、王に直属するエリート軍人ではなかったのだろう。この人は自薦であり、死んでもおらず、解放者になれた理由がよく分からない。分捕った牛が立派だったからか。

**[事例 14] Kigeri III Ndabarasa の Mubari 攻めの解放者 Nyabugondo 王女**

Ndorwa を征服した Kigeri III Ndabarasa は、東の小王国 Mubari（事例 12）を攻めた。その都は Gishamba 湖に浮かぶ Shango 島にあった。従来、Ndabarasa は Mubari の Biyoro 王や王母と友好関係にあったので、Kigeri III は自分の娘の Nyabugondo 王女を Biyoro 王に嫁がせようと提案し、相手は喜んで受けた。Kigeri III は王女を解放者として送り出した。二度と父王に会うことはない。軍隊を送り込む船団の用意ができると、Kigeri III は Mubari 国境近くの Rubona に行き、娘の婿と姑を招待した。母子は招待を受けて Rubona に来た。その途中でルワン

ダ軍が襲い、王母は捕らえたが、Biyoro 王は逃げた。しかし Shango 島には既にルワンダ軍の船団が攻め込んで Mubari の王権太鼓を捕獲していたので、Biyoro は東の Karagwe 王国に亡命した。Kigeri III は Karagwe に使いを送り、「Ruganzu II Ndori 以来、ルワンダが Karagwe を攻めるのは禁じられてきたが、Biyoro を渡さなければ、攻めるぞ」と脅した。Karagwe 王は Biyoro を引き渡した。こうして Mubari の王と王母はルワンダの死刑執行人に殺され、Mubari はルワンダに併合された。Nyabugondo 王女は Shango 島から連れ戻されたが、解放者として送られたので、宮廷に帰ることはできず、Cyeza（今の Gitarama 県の Rutobwe 村）に住んで非常に長生きした (Kagame 1972: 154-156)。

この王女の場合を含め、指名したのが神託なのかどうか分からない記述がかなりある。「攻撃的解放者は後戻りできない」という規則は、他の伝承でも言われる。たとえば事例 2 の Bwimba が、国境地帯に到達した後、何度も宮廷に指令を送って国境まで使いを来させることに関して、「一度出発した解放者はいかなる理由があっても後戻りできない」と言われる (Kagame 1972: 59)。

攻撃的解放者が生還するのはこの事例だけだが、政略結婚で嫁ぐ場合、死なずに夫とその国を呪術的に害する方法があったのかもしれない。あるいは、この Mubari 攻めは軍事的に成功したので、結果主義的な認定なのかもしれない。

#### **[事例 15] Mibambwe III Sentabyo の Bugesera 攻めの解放者 Semahangura**

Mibambwe III Sentabyo の時代に、好戦的なブルンジ王 Ntare IV Rugamba が即位し、Bugesera を攻めて北上してきた。同国の北部国境はルワンダの中心の Kigali 山に非常に近く、強国ブルンジにそこまで迫られると困るので、ルワンダが Bugesera 北部を占領して、ブルンジ

との国境をもっと南で設定しようということになった。

他国を併合する前には必ず解放者が血を流さなければならないので、Semahangura という人が解放者に指名され、ルワンダ軍は Bugesera を攻めた。Bugesera 王は Gisaka に脱出し、Bugesera の王権太鼓と王の雄牛はルワンダ側が捕獲した。ルワンダ軍は南に進撃し、ブルンジ軍を Cyohoa 湖と Rweru 湖付近で阻止し、そこが国境になった (Kagame 1972: 166-167)。

Semahangura という解放者については不明。

#### [事例 16] Mibambwe III Sentabyo の Gisaka 攻めの解放者 Semucumisi

Mibambwe III Sentabyo が Gisaka を攻める際、最初、偉大な解放者 Gihana の息子の Kanywabahizi が解放者に指名された。ところが彼は役目を放棄して Gisaka に亡命してしまった。どうやら彼は Sentabyo と王位を争って Gisaka に逃げた Gatarabuhura の支持者だったらしい。この裏切者の代わりに、王の異母兄弟の Semucumisi 王子が解放者として身を捧げた (Kagame 1972: 168)。

#### [事例 17] 天然痘を止めた Mibambwe III Sentabyo は解放者

Mibambwe III Sentabyo の時代に天然痘が流行り、王も感染して死んだ。そこで宮廷の人々は王の死を気高いものにするため、王は自発的に天然痘の膿を植え付けて病気に感染したのだ、王は自分の命を捨てて国民を救おうとしたのだと言った。この高貴な犠牲と共に天然痘はやみ、Mibambwe III Sentabyo は解放者 (*abatabazi*) の仲間入りした (Pagès 145-146)。

事例 17 と次の 18 は防衛的解放者の事例であり、いずれも偶発ないし自薦で犠牲になった人が後から解放者の称号を与えられ、18 の場合は遺族に

優遇措置がとられる。

### 〔事例 18〕 幼い王を守った赤ちゃん解放者と召使解放者

Mibambwe III Sentabyo が天然痘で死んだ。王母は王より長生きできないという規則に従い、王母も服毒死した。王には Nkenzabo という息子がいたが、この子も王と同じ日に天然痘で死んだ。

しかし王にはもう 1 人王子がいた。前年、Mayaga 地方で狩を催した際、王は偉大な解放者 Gihana 王子の未亡人の家に逗留した。その後、彼女は王に妊娠したと告げ、王が死ぬ数ヶ月前に男の子を産んだ。王は子供を認知する贈物を送り、子供を Gahindiro と名付けた。王が亡くなると秘典専門家たちは母子を保護し、通常の 4 ヶ月という間を置かず、直ちに Yuhi IV Gahindiro の即位式を行った。

一方、王の死を知った異母兄弟の Gatarabuhura は、亡命先の Gisaka から大軍を率いて帰国し、新王と王母を暗殺するために刺客を放った。このことはスパイを通じて宮廷に漏れた。宮廷では刺客を捕える代わりに、呪術的な畏をもうけた。オジの方が軍事的に強いので、解放者の死によってその力を無効にしなければならない。宮廷の侍女の Kiyange が王母の身代りになると申し出た。王の代りの赤ん坊は、宮廷の侍女の Nyiramuhanda が自分の子供 Rubanzangabo を差し出した。2 人は王と王母の寝所で解放者として刺客に殺された。あとで遺族には褒賞が与えられた。

翌朝、宮廷から王の起床を告げる太鼓が鳴った。騙されたと知って Gatarabuhura は軍隊に攻撃を命じた。軍の中心は旧 Kigeri III Ndabarasa (幼王の祖父) の護衛隊 Urukatsa で、それを指揮するのは Semugaza 王子だった。ところでこの王子の母は新王母とは同父同母の非常に仲のいい姉妹だった。宮廷軍が敗走し始めるのを見て、王子は幼王と王母の味方についた。Gatarabuhura は逃げ出したが、途中で捕まり、Bugesera の Bayanga の井戸で溺死させられた (Kagame 1972: 168-173)。

### [事例 19] Yuhi IV Gahindiro の Ndorwa 攻めの解放者 Rwambali

Tsobe クランの Rubona (事例 9) の死後、Abadahemuka 軍の指揮権は息子の Rwambali が継いだ。この Rwambali も Yuhi IV Gahindiro の時代に Ndorwa との戦争で攻撃的解放者になった。彼が解放者として来ているという情報が漏れたため、敵は逃げ回った。そこで彼は夜中に盗賊のふりをして攻撃をかけ、Gahondo の近くの Rurangara で殺された (Kagame 1963: 98)。Rwambali のあとは息子の Semuzigura が継いだ。彼は解放者にはならなかったが、Cyirima II Rujugira のミイラの埋葬を巡って対立する Mutara II Rwogera と王母の板挟みになり、毒を仰いで死んだ (Kagame 1972: 208)。

事例 1、9 に次ぐ 3 人目の Rwambali である。彼の息子も、戦争とは別のコンテキストだが、国のために死んでいる。

### [事例 20] Mutara II Rwogera の Gisaka 攻めの解放者 Ntabyera

Mibambwe III Sentabyo の時代に、Semucumisi 王子が Gisaka 攻めの攻撃的解放者 *umucengeli* として送られたことを我々は知っている。しかし、この犠牲は Mibambwe III Sentabyo の治世でしか有効でなかったようだ。現に、Mutara II Lwogera の宮廷は Ntabyera という別の解放者を送る必要があると考えたのだから。その解放者の死を知って Gisaka の Ntamwete 王は茫然自失した。それは Gisaka の併合をルワンダが決意したということであり、ルワンダからの今後の攻撃は単なる略奪目的ではないことを意味したからである。しばらくして、ルワンダの決死隊が侵入して夜中に Gisaka の王宮広場に穴を掘り、Gisaka の併合に吉の神託を出した占いの動物（雄羊または雛鳥）を埋めてイチジクの木を植え、カオリンを撒き散らした。翌朝、家臣たちはそれを掘りあげて捨てようとしたが、Ntamwete 王は「よそへ移せば、それを讃えて行進することになる。焼けば、国がその煙を吸う。そのまま放っておけ」

と命じた。その後、木は巨木に生長し、*immana ya Rwogera*（ルワンダ王 Rwogera の占いの記念）と呼ばれた。

Mutara II は Ntamwete を殺して Gisaka を征服したが、王権太鼓が見つからなかった。結局、次の Kigeri IV Rwabugiri の時代になってやっとルワンダは太鼓を手に入れ、Gisaka の併合を完了した (Kagame 1972: 200–206; Kagame 1975: 36)。

Ntabyera という名の解放者は事例 11b にも出てきた。11 の Ntabyera は Tsobe クランだったが、こちらの Ntabyera の素性は不明である。

## [事例 21] Nkoronko の死

Kigeri IV Rwabugiri の時代、1880 年か 1881 年に Nkoronko はブルンジ国境に連れて行かれて、解放者と称して殺された (Vansina 2001: 217)。

以上の事例を表にまとめる（# は解放者ではない。\*はブルンジの解放者）。

	事例	解放者	出身	攻守	生死	相手	時代	指名
1	1	Rwambali	Tsobe	攻撃	死	Ndorwa	Nsoro I Samukongo	
2	2	Ruganzu I Bwimba	王	防衛	死	Gisaka	Ruganzu I Bwimba	指名
3		Rogba	王の姉妹	防衛	自殺	Gisaka	同上	
4	3	Sekarongoro (Mibambwe I Mutabazi)	王子	防衛	額に負傷	Bunyoro	Kigeri I Mukobanya	偶発
5	4	Nkoko	王の兄弟	攻撃	死	Nduga	Mibambwe I Mutabazi	
6		Gatambira	王子	攻撃	死			
7		Mihira	王の孫	攻撃	死			
8		Munyanya	亡命者	攻撃	死			
9	5	Forongo	王子	攻撃	死	Bunyoro		指名

10	6	Binama	Yuhi II Gahima の 子（実父は 敵国王）	攻撃	死	Bungwe	Mutara I Semugeshi	指名
11	7	Ndahiro II Cyamatara	王	防衛 (亡国)	死	Bunyabu ngo	Ndahiro II Cyamatara	後世の 詩人
12	8	Kibogo	王子	防衛	死	千魃		
13	9	Rwambali	Tsobe	攻撃	死	Gisaka	Mibambwe II Gisanura	
14	10	#Kamali	Ega の男と Ndorwa の 王女の子	呪術的司 令官		Ndorwa	Cyrima II Rujugira	
15		不明	不明	攻撃	死	Ndorwa		
16	11a	Gihana	王子	攻撃	死	Burundi	Cyrima II Rujugira	指名
17		*Rurinda	王のいとこ	防衛	自殺	Rwanda		指名
18	11b	Rubona	Tsobe	攻撃	死	Burundi		自薦
19		*Kivumajoro	王子	防衛？	自殺	Rwanda		指名
20		Ntabyera	Tsobe	防衛？	自殺	Burundi		指名
21	11c	*Mutaga III	王	防衛	死	Rwanda		指名
22		#Rwambal の軍	Tsobe	(攻撃)				指名
23		#Rutanda の軍	亡命者	(攻撃)				指名
24	12	Nkondogoro	王の甥	攻撃	死	Mubari		
25	13	Rubuguza	王家でない	攻撃	死	Gisaka		自薦
26	14	Nyabugondo	王女	攻撃	生還	Mubari	Kigeri III Ndabarasa	
27	15	Semahangura	不明	攻撃	死	Bugesera	Mibambwe III Sentabyo	
28	16	Semucumisi	王の異母 兄弟	攻撃	死	Gisaka		
29	17	Mibambwe III Sentabyo	王	防衛	死	天然痘		偶発



30	18	Rubanzangabo	侍女の息子	防衛	死	王のオジ	Yuhi IV Gahindiro	自薦
31		Kiyange	侍女	防衛	死	王のオジ		自薦
32	19	Rwambali	Tsobe	攻撃	死	Ndorwa		
33	20	Ntabyera	不明	攻撃	死	Gisaka	Mutara II Rwogera	
34	21	Nkoronko	王のオジ	暗殺のカ ムフラ ージュ	死	王	Kigeri IV Rwabugiri	

Nkoronko は Mutara II Rwogera の弟で、Kigeri IV Rwabugiri のオジ（または実父）であった。かつて宮廷の勢力争いから、Kigeri IV の王母が妊娠したという噂を Nkoronko 一派が立てた。嘘を信じた Kigeri IV は母を殺させたが、事実を知ると一派に復讐を始め、最後に残っていたのが Nkoronko だった。Kagame は Nkoronko の死にいたる顛末を詳しく書いているが (Kagame 1975: 40-48)、解放者と言う名目で殺されたとは言っていない。ファンシナはカガメとは違う民間伝承によっている。この場合、解放者としての死は、大物の Nkoronko を殺すに当たっての表向きの口実というだけではなく、国境で王家と国家の汚れを祓う意味があるのかもしれない。

## 6. 槍と短刀：軍隊と攻撃の解放者をめぐる宮廷論争

Cyirima II Rujugira (1770-1786) の時代に、宮廷詩人 (*ibisigo*) たちのあいだで攻撃の解放者と軍隊のどちらが重要かという問題について論争があったらしい。

事の起こりは、詩人の Kalimunda が鍛冶屋の Muhabura に古鉄を渡し、槍先を作るよう頼んだことである。Muhabura は引き受けたが、なかなか作らなかった。しびれをきらした Kalimunda は、「王に勝利を与える武器」という詩を作り、鍛冶屋は槍先を優先的に作るべきだと王に訴えた。そこで王が鍛冶屋にただしたところ、Muhabura は「王の神託を解き明かす武器」と

いう詩を詠んで反論し、今が戦争中なのは知っているし、告発者が待ちきれないのも分かるが、自分は国を守るためにより重要な武器つまり短刀の注文を優先している。腸ト官は短刀を使って鶏や雄羊や雄牛の内臓を開いて神託を発見する。この神託によって、誰が王になるかも、誰が攻撃的解放者になるかも決まる。解放者は戦士たちより重要である。なぜなら神託が指名した解放者の血によって征服が購われない限り、戦士たちは法的に敵国を征服してルワンダに併合することはできないのだから。

王は論争に決着をつけさせるために Giharwa の息子の Nyamugenda を招いた。詩人は「訴訟が年寄りの出席を必要とする時」という詩を作り、槍も重要だが、神が動物の内臓の中に隠した真理を人間が発見できるのは短刀のおかげであり、王を指名するのも動物の内臓による神託だから、槍より短刀、軍隊より解放者の方が重要だとした。

しかし Kalimunda たちは納得しなかったので、鍛冶屋の Muhabura は、軍隊重視派の代表格の Bagorozi に向かって「戦いにおける王の決定的な日を Bagorozi に教えよう」という詩を作り、外国の征服の手続きに関するルワンダの伝統的な理論を要約した。つまり、

攻撃的解放者 (*umucengeli*) のいない遠征は略奪だけして帰る、王権太鼓もとらず、王座も奪わずに。(Kagame 1969: 220-221, 45-49 行)

王が殺されておらず(二次的な条件)、王権太鼓が捕獲されていない(最も重要な条件) 国をルワンダは法的に併合することはできない。遠征軍がいかに重要であるにしても、相手国を買うために攻撃的解放者が自分の血を流す前に、軍隊が敵王を殺したり王権太鼓を捕獲したりするのは禁じられている。

これに対し Bagorozi は、解放者は戦死することと相手国を征服することの両方はできない。征服は軍隊が行うのだ。とはいえ、太鼓(王)のために働く者は別々に行動するのではない。

解放者を軽視する気はさらさらないが、  
解放者は、槍で突く戦士たちの補佐でしかない  
軍隊は、神託で指名された者を補助するが、  
皆殺しにさせられずに、太鼓を持って帰る  
軍隊を助ける解放者を私は軽視するのではない (Kagame 1969: 234–235, 77–85 行)。

カガメは双方の対立が妥協の余地がないかのように詩の内容を紹介し、「解放者より軍隊の方が重要だということは、間接的には王よりも軍隊の方が重要だということだが、それは誰も口にしない」と述べ、Bagorozi が「軍隊は、神託で指名された者を補助する」と言っているのは矛盾だとしている (Kagame 1951: 148)。しかし Bagorozi の主旨は解放者の全面否定ではない。解放者も大事だが、解放者だけ送って済むものではなく、戦争に勝つには大勢の兵士を保持することが先決であり、青年や子供の養育が重要であるということのようだ。

このような応酬を聞いた後で、王は「Muhabura は子牛を牛小屋に連れて帰る母牛のようで、Bagorozi は母牛の足を折る穴のようだ」と評した。前者の主張もよかったが、後者の方がやや上という意味らしい (Kagame 1951: 144–148; Kagame 1969: 216–244)。

先に見たように Cyirima II Rujugira の時代は、ブルンジなどとの戦争が頻発し、国境警備軍の創設をはじめとする軍隊の強化が図られた時代だったから、詩人たちの論争が Bagorozi の詩の線で落ち着いたのは自然であったといえよう。

## 7. 解放者伝承の解釈の問題

解放者についての従来の研究者の見解としては、資料整理のなかに滲み出ているカガメの正統的解釈の他に、ファンシナの解放者＝カムフラージュ説と、いわばその対極にあるド・ウーシュの解放者＝人身御供説がある。ド・ウー

シュの構造主義的分析、細部に関する恣意的な取捨選択や脈絡からの逸脱に対して、ファンシナは非常に手厳しい批判を行ったが (Vansina 1983)、ド・ウーシュはファンシナが批判しているのは自分というよりレヴィ＝ストロースだと、どこか他人事のように話している (Maret 1993: 292)。今回の資料整理に基いて、三者の考え方についていくつか批評を加えて結論にかえたい。

ファンシナは、上記の宮廷詩人たちの論争が、Cyirima II Rujugira と Kigeri III Ndabarasa の時代に軍長たちの重要性が増して儀礼専門家の地位が脅かされ、両集団の間で勢力争いが起きたことの現れと見ている。ただ、彼も認めているように (Vansina 2001: 113)、Tsobe の第一級の儀礼専門家だった Rubona は Rujugira から軍隊を任せられ、ブルンジとの戦いで死んでおり (事例 11b)、軍と儀礼家の対立を強調しすぎてはいけない。先に見たように、ファンシナは呪術的な制度としての解放者の存在を否定し、解放者は高位の人物が戦死したりルワンダ軍が戦闘に負けたりした時のショックを取り繕う方便として考え出されたに過ぎないと言うのだが、もし彼が詩人たちの論争が実際にあったと考えるのなら、彼は王や詩人たちが彼のいう即物的なカムフラージュについて長々と論争をしたと思っているのだろうか。論争の存在は認めて、詩の中に出てくる解放者の伝統的理論の存在は認めないのは無理がある。

もちろん、ファンシナの説が全く無意味だと言いたいわけではなく、事例 21 は Nkoronko 殺しを取り繕うために解放者というラベルが利用されたという伝承なのであろうし、他にも取り繕いタイプのものが含まれているのかもしれない。しかし、その事例はあくまで少数であり、正統的な解放者の理論・信仰の存在は否定できないだろう。

ルワンダの 28 人の解放者の出身を見ると、王家 (16 人) と Tsobe (6 人) で 8 割近くを占め、特に Tsobe の存在感が大きい。王、王母に次いで第 3 の地位を占める Tsobe クランが、その立場に見合った犠牲を払っていたあらわれと見るのが出来よう。それらの解放者を全て不慮の死を取り繕う消極的対応とみなすより、ファンシナ自身が強調しているルワンダの軍国主義的

膨張や王家と Tsohe の勢力強化 (Vansina 2001) に対応するイデオロギー装置の一環として攻撃的解放者という制度が生まれたと考えた方が適切なのではなからうか。

ただ、そのような制度がカガメが書くほど整然としていたのかどうかは分からない。上の事例のなかには、カガメが定義した解放者のイメージからかなり逸脱したものがあることも確かである。今「逸脱」と言ったが、これらの「逸脱」例から逆にカガメの理詰め of 整理にある「無理」を点検しなおすという作業が必要になるだろう。

ド・ウーシュの議論は、ファンシナ (Vansina 1983: 323) も言っているように要約が非常に難しいのだが、攻撃的解放者を異形者と重ね合わせる：「《解放者》の犠牲的行為は、ちょうど乳房のない女性の供犠が敵に災禍をもたらすのと同じように、単に戦争遂行の、敵を潰走させるための、神秘的な一手段に過ぎない」(de Heusch 1986: 180; ド・ウーシュ 1998: 159)。しかし、上 (事例 3b) で見たように、異形者 *-mara*, *-mazi* の供犠は防衛的解放者とまず比較すべきである。

攻撃的解放者を乳房のない女性と同レベルで扱ってしまっは、攻撃的解放者信仰のバックボーンをなす「敵王の命の対価を前もって支払うことによって敵国征服の権利を自らに与える」という極めて傲慢なルワンダ王国の膨張主義を見据える視点が完全に抜け落ちてしまう。ド・ウーシュの神聖王権の比較研究における王の自己供犠のテーマを追求するにはそれでいいのかもしれないが、ルワンダの解放者伝承を理解するにはピントが外れているように思われる。

## 文 献 目 録

- Arnoux, Alexandre. 1912–1913. «Le culte de la société secrète des Imandwa au Ruanda.» *Anthropos*, VII (2), 1912: 273–295, 7 (3): 529–558, (4): 840–874, VIII (1), 1913: 110–134, (3): 754–774.
- Beattie, John. 1971. *The Nyoro State*. Oxford at the Clarendon Press.
- Bourgeois, R. 1956. *Banyarwanda et Barundi. Tome III, Religion et magie*. Bruxelles, Académie royale des Sciences coloniales, Classe des Sciences morales et

- politiques, Mémoires in 8°, Nouvelle série, Tome IV, fasc. 2 et dernier. (Ethnographie).
- Coupez, A. et Th. Kamanzi. 1962. *Récits historiques rwanda dans la version de C. Gakaniisha*. Tervuren, Musée Royal de l'Afrique Centrale, Annales, Série in 8°, Sciences humaines, no. 43.
- Coupez, A. et Th. Kamanzi. 1970. *Littérature de cour au Rwanda*. Oxford, Clarendon Press.
- Coupez, A., Th. Kamanzi, S. Bizimana *et al.* 2005. *Inkoranya y ikinyarwaanda mu kinyarwaanda nō mu gifaraansá. Dictionnaire Rwanda-Rwanda et Rwanda-Français*. 3 tomes. Butare: Institut de Recherche Scientifique et Technologique, Tervuren: Musée Royal de l'Afrique Centrale.
- de Heusch, Luc. 1966. *Le Rwanda et la civilisation interlacustre. Etudes d'anthropologie historique et structurale*. Bruxelles: Editions de l'Institut de Sociologie de l'Université Libre de Bruxelles.
- de Heusch, Luc. 1982. *Rois nés d'un cœur de vache. Mythes et rites bantous, II*. Paris, Gallimard.
- de Heusch, Luc. 1986. *Le sacrifice dans les religions africaines*. Paris, Gallimard.  
(ド・ウーシュ、リュック 1998『アフリカの供犠』浜本満・浜本まり子訳、東京：みすず書房。de Heusch 1986 の英訳をもとにした邦訳。)
- de Lacger, Louis. 1961. *Ruanda*. Réédition, en un volume, de l'ouvrage publié en deux volumes en 1939, avec un supplément (en pp. 651-725) par D. Nothomb. Kabgayi: Imprimerie de Kabgayi.
- Delmas, Léon. n.d. [1950] *Généalogies de la noblesse (les Batutsi) du Ruanda*. Kabgayi, Vicariat Apostolique du Ruanda.
- de Maret, Pierre. 1993. "An Interview with Luc de Heusch." *Current Anthropology*, 34 (3), 289-298.
- d'Hertefeldt, Marcel, et André Coupez. 1964. *La royauté sacrée de l'ancien Rwanda: texte, traduction et commentaire de son rituel*. Bujumbura (Burundi), Travaux de l'Université de Bujumbura, série A. Faculté de Philosophie et Lettres, n° 2/ Tervuren, Extrait des Annales du Musée Royal de l'Afrique Centrale, Série in-8°, Sciences Humaines, n° 52.
- Historique et chronologique du Ruanda*. n.d. [1954], n.p. [Kigali, Rwanda].
- Kagame, Alexis. 1947. «Le code ésotérique de la dynastie du Rwanda.» *Zaire*, 1 (4), 363-386.
- Kagame, Alexis. 1951. *La poésie dynamique au Rwanda*. Bruxelles, Institut Royal Colonial Belge, Section des Sciences morales et politiques. Mémoires.-Collection in-8°, Tome XXII, fasc. 1.
- Kagame, Alexis. 1952. *Le code des institutions politiques du Rwanda précolonial*. Bruxelles, Institut Royal Colonial Belge, Section des Sciences morales et politiques. Mémoires.-Collection in-8°, Tome XXVI, fasc. 1.
- Kagame, Alexis. 1954. *Les organisations socio-familiales de l'ancien Rwanda*. Bruxelles, Académie Royale des Sciences Coloniales, Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires in 8°, Tome XXXVIII, fasc. 3.
- Kagame, Alexis. 1959. *La notion de generation appliqué à la généalogie dynastique*

- et à l'histoire du Rwanda des Xe-Xie siècles à nos jours*. Bruxelles, Académie Royale des Sciences Coloniales, Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires in 8°, Nouvelle série, Tome IX, fasc. 5 et dernier.
- Kagame, Alexis. 1963. *Les milices du Rwanda précolonial*. Bruxelles, Académie Royale des Sciences d'Outre-Mer, Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires in 8°, Tome XXVIII, fasc. 3. (Histoire).
- Kagame, Alexis. 1967. «Description du culte rendu aux trépassés du Rwanda.» Bulletin des Séances de l'Académie Royale des Sciences d'Outre-Mer, n.s., XIII (4), 746-779.
- Kagame, Alexis. 1969. *Introduction aux grands genres lyriques de l'ancien Rwanda*. Butare, Editions Universitaires du Rwanda, Université Nationale du Rwanda, Collection Muntu, n° 1.
- Kagame, Alexis. 1972. *Un abrégé de l'ethno-histoire du Rwanda*. Tome 1. Butare, Editions Universitaires du Rwanda, Université Nationale du Rwanda, Collection Muntu, n° 3.
- Kagame, Alexis. 1975. *Un abrégé de l'ethno-histoire du Rwanda*. Tome 2. Butare, Editions Universitaires du Rwanda, Université Nationale du Rwanda, Collection Muntu, n° 4.
- Kantorowicz, Ernst H. 1965 (1951). "Pro Patria Mori in Medieval Political Thought." In Ernst H. Kantorowicz, *Selected Studies*, pp. 308-324, Locust Valley, New York: J. J. Augustin Publisher.
- Lévy-Bruhl, Lucien. 1922. *La mentalité primitive*. Paris: Félix Alcan.
- Nkurikiyimfura, Jean-Népomucène. 1989. «La revision d'une chronologie: le cas du royaume du Rwanda.» In Claude-Hélène Perrot (éditrice), *Sources orales de l'histoire de l'Afrique*, pp. 149-180. Paris: Éditions du Centre National de la Recherche Scientifique.
- Nkurikiyimfura, Jean-Népomucène. 1994. *Le gros bétail et la société rwandaise: évolution historique des XIIe-XIVe siècles à 1958*. Paris: L'Harmattan.
- Pagès, A. 1933. *Un royaume hamite au centre de l'Afrique*. Bruxelles, Institut Royal Colonial Belge, Section des Sciences morales et politiques. Mémoires.-Collection in-8°, Tome I.
- Roscoe, John. 1911. *The Baganda: an Account of their Native Customs and Beliefs*. London: Macmillan.
- Smith, Pierre. 1970. «La forge de l'intelligence.» *L'Homme*, 10 (2), 5-21.
- Smith, Pierre. 1975. *Le récit populaire au Rwanda*. Introduit et édité par Pierre Smith. Paris: Armand Colin, Classiques africains.
- 宇野公一郎 2007 「ルワンダの王と王母の系譜の構造」『論集（東京女子大学紀要）』 57 (2), 113-150.
- Vansina, Jan. 1962. *L'évolution du royaume Rwanda des origines à 1900*. Bruxelles, Académie Royale des Sciences d'Outre-Mer, Classe des Sciences morales et politiques, Mémoires in 8°, Nouvelle série, Tome XXIV (Histoire), fasc. 2 et dernier.
- Vansina, Jan. 1983. "Is Elegance Proof? Structuralism and African History." *History in Africa*, 10, 307-348.

- Vansina, Jan. 2000. “Historical Tales (*Ibiteekerezo*) and the History of Rwanda.”  
*History in Africa*, 27, 375–414.
- Vansina, Jan. 2001. *Le Rwanda ancien. Le royaume ngiginya*. Paris: Karthala.

キーワード

ルワンダ、王権、軍事制度、解放者、供犠、異形者、Alexis Kagame,  
Jan Vansina, Luc de Heusch